

通常小学校における聴覚障害理解授業の実践とその効果に関する研究

特別支援教育専攻

障害科学コース

M11105E

関屋 悦子

1. 問題と目的

近年のインクルーシブ教育の風潮の高まりにより、通常小学校を選択する聴覚障害児が増えつつある(学校基本調査, 文部科学省, 2011)。美濃・鳥越(2007)は、聴覚障害児が通常学校で満足のいく生活を送るために課題となるのが、学習・障害認識・友人関係の3つの領域であると報告している。この中でも、友人関係の問題に関する報告が多くあり、通常学校の中で、聴覚障害児が聴児との友人関係を形成し維持していくことは困難なことである。

田原(2001)が通常小学校の聴児に対して行った調査によると、「聞こえにくいことに対してどう思うか。」との設問に対して、同じ学級で過ごす聴児の7割以上が「わからない」と回答していた。また、コミュニケーションがうまくいかないのは、「聴覚障害児が話を聞いてくれない」「自分たちのことばをわかってくれない」のが原因だと考えており、通常学校における聴覚障害理解は十分であるとは、とても言い難いのが現状である(池谷, 2007)。

子どもたちの学校生活の中で最も自発的に活動しているのが、休み時間を中心とした「遊び」の場面である。遊びの場面では、教師の介入が少なく、子ども同士の障害に対する理解が最も必要な場面である。しかし実際には、音声でのやりとりが遊びの中心となるため、状況を理解できず不満を抱えている聴覚障害児は多い。そこで本研究では、聴覚障害児との遊びの場面について、聴児自らが考えることができるような障害理解授業を開発し、実践を通して、聴覚障害に対する理解と、その後の関わり方に変化について、その効果を検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 対象：X市立Y小学校3年生34名(手話を第一言語とする聴覚障害児が一名在籍)及び担任教員

2.2 調査期間：2012年5月～9月

2.3 手続き

①事前調査：児童へのアンケート(聴覚障害について・遊びについて)及び担任へのインタビュー(遊びの時間を中心とした両者の関わりについて)を行った。

②授業実践：障害理解授業を1校時用いて行った。めあては、「聴覚障害について知ること」及び「遊びの場面での問題点に気づき、自分たちにできることは何か考える。」ことであった。前者に関しては、教員が講義を行い、後者に関しては、小グループで、与えられたテーマについて話し合い活動を行った。

③事後調査：児童へのアンケート(授業の中で気づいたこと・今後の生活で実践してみたいこと)及び担任へのインタビュー(授業実施後の遊びの場面での変化について)を行った。

④調査期間中、適宜、授業場面や遊びの場面での参与観察を行い、聴覚障害児と聴児のかかわりに関して、エピソード収集を行った。

3. 結果と考察

3.1 事前調査

①児童へのアンケート「聴覚障害について」

質問1：聞こえないことについて知っていること

聴児の関心は、聴覚障害者の置かれている状況ではなく、日頃から目にする機会の多い手話等コミュニケーション手段に置かれていることがわかった。

質問2：補聴器について知っていること

補聴器は万能であると考えていたり、「ほりから耳を守るため」と耳の保護目的でつけていると思ったり、誤った認識をしている聴児が大多数であった。

質問3：聞こえなくて困ること

情報保障に関しては、TVや電話に関する回答が主で、日常の友人同士の会話等に関する回答は見られなかった。また手話に関しては、手話を獲得することは困難なことであり、手話がなければ友だちにはなれないと考えていた。

質問4：知っている手話・指文字

「あいさつ」・「自分の名前」・「指文字」・「動物の名前」に関する単語が収集できたが、各カテゴリーともごくわずかな単語数であり、日常的に活用できる単語はほとんどなかった。

②児童へのアンケート「遊びについて」

聴児の遊びとA児の遊びとして挙がっているものは、全く合致しておらず、A児と聴児は、十分に遊びを共有できていないことが伺えた。

③担任へのインタビュー

多くの聴児はA児に対して、責めもしないが歩み寄りもしないという態度であった。結果として、A児は同じ空間にいるだけの状態であり、通常学校に入ってきた本来の目的を果たせていないと担任は考えていた。

3.2 授業実践

①学習1：聴覚障害について知る

授業の序盤では、聴覚障害に対して、「手話」「補聴器」といった漠然としたイメージしか持っていなかった。しかし講義が進んでいく中で、「手話」や「補聴器」がどういうものなのか知り、それをA児の様子とつなげて考えていた。その後、自分たちのA児との日頃のコミュニケーション場面を振り返り、それが正しい方法であったのか検証し、今後についての意見が出た。講義をすることによって、漠然としたイメージだった聴覚障害がより具体化され、自分たちの生活へとつなげていくきっかけになったと思われる。

②学習2：遊びの場面について考える

話し合い活動の中で出てきた発言を分析した、①聴覚障害児の責任として考える、②第三者に依頼する、③自分たちの問題として捉える、④聴覚障害児の立場で考える、という4つのカテゴリーに分類することができた。これらは時系列的な傾向が見られ、聴児が話

し合い活動を通して、障害について理解を深めていった過程だと考える。

3.3 事後調査

①児童へのアンケート

事前調査の段階では、手話や補聴器にだけ関心が向き、それを使用する聴覚障害児とは、別の存在として捉えていた。しかし、事後調査では、「手話」「補聴器」と「聴覚障害児」というように別のカテゴリーとして捉えるのではなく、聴覚障害児というカテゴリーの中に、彼らが使うツールとして手話や補聴器が存在すると捉えていた。このことから手話や補聴器といった外的要素への視線から、聴覚障害児個人へと関心が移ったことが伺えた。

②担任へのインタビュー

授業で実施した内容が、その時間内だけにとどまらず、維持されていたことが確認できた。聴児の中で、聴覚障害に対する理解が生まれ、A児のことを意識することができるようになってきた。しかし、支援することこそ最善の方法だと捉え、A児の意志を無視した押し付け的な行動をとる聴児がおり、今後、A児にとって必要な支援が何か取捨選択できるようになる授業の提案が必要と考える。

3.4 参与観察

事前調査時には、両者が同じ遊びを共有する場面が少なかったが、事後調査の時点では、同じ遊びを共有し、また聴覚障害児が参加できる時間が増加していた。

4. 今後の課題

多くの障害児及び、それを取り巻く健常児たちは、その年齢や環境に応じて、様々な問題に直面する。そういった問題に対処できるような力を育む教育が今後必要となってくるだろう。本研究で行った遊びの場面をテーマに行った話し合い活動は、その第一歩に過ぎず、今後も継続して、子どもたちの成長段階や置かれている状況に応じたテーマを設定し、取り組んでいくことが必要だと考える。

主任指導教員 鳥越 隆士

指導教員 鳥越 隆士